大人が絵本を
第40回　紙の絵本の

司書・読書アドバイザー　安藤　宣子※
小児歯科医師　濱野　良彦※※
※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ（福岡市）
※※ 医療法人元気が湧く　理事ファウンダー

出版業界のいま

児童書出版社大手を誇る小学館は、今年１月15日に発売した読み聞かせ絵本雑誌の「おひさま」2018年2/3月号をもって、休刊としました。「おひさま」は、小さな子ども向けの読み切り短編作品を掲載する絵本唯一の定期刊行誌で、スタートした1994年当初は月刊、後に隔月刊で発行されました。小学館は休刊の理由を、「出版と書店を取り巻く環境の変化は激しく、昨今では絵本を求める読者のニーズに充分にお答えできない状況となっていました。今後は雑誌という形に縛られずに新しい絵本作品を発信していく方針のもと、休刊する決断に至りました」と説明しています[1)]。

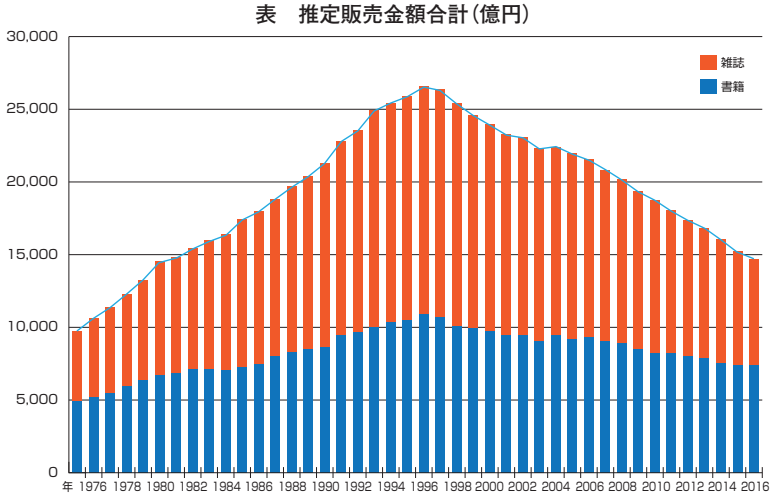
長らく続く出版不況の実態をお話しますと、出版市場がピークだった1996年の書籍と雑誌の総売上高は、２兆6563億円でしたが、2016年はその数値を６割も下回る１兆4709億円の水準まで縮小しました。出版市場は発起以降、年々右肩上がりで、日本に絵本ブームが起こった1970年代半ばの76年には、初めて1兆円市場に達して、さらに上り詰めた1996年の頂点を境に、山なりに下がり続けているところの最低数値の現在、興隆期にあった1981年の売上高と同値に当たるのです（下表）[2)]。書籍と雑誌の売上は今後、1975年以前のように１兆円を割り、その歴史変遷のグラフはシンメトリーになってしまうのでしょうか。

2016年はさらに、出版業界史に記録される現象が起こりました。雑誌の売り上げが、41年ぶりに書籍を下回り、1970年代半ばから続いた「雑高書低」と呼ばれてきた出版界の通年が崩れたのです。電子機器環境の急速な変化や、電子書籍の影響は否めず、業界は大きな転換期を迎えることになりました。

この出版不況は、雑誌不況によるものだけでなく、売れ行き有望株とされてきたコミックの不振が大きな原因といわれています。コミック誌全体の年間発行部数は、前年比12％減と過去最大の落ち込みをみせ、また、単行本コミックの年間推定販売金額も前年比8.5％減と過去最大の落ち幅となりました[3)]。

こうしてみると、電子書籍の影響をもっとも受けている紙媒体は、コミックと言えるでしょう。

表　推定販売金額合計（億円）



『出版指標年報2017年版』
「推定販売金額」より
グラフ化

手にするときは！
元気なお・は・な・し

企画　濱野　良彦
構成　木須　信生※※※
※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ（福岡市）

出版不況を吹き飛ばす「絵本」！

絵本界でも、雑誌不振の動向はご多分に漏れず、「おひさま」が休刊となりました。では、書籍に分類される「絵本」はどうなのでしょうか。ビブリオキッズの所在する福岡県では、児童書フロアを縮小した大型書店もあり、気になるところです。『出版指標年報2017年版』によると、文庫の前年比６％減が書籍全体の売上減少に響いた一方で、「児童、実用、学参などは前年を上回る好調で全体の伸びに貢献した」と報告しています[4)]。厳しい出版不況時代にあって「児童書」は、推定販売金額を868億円と３年連続で伸ばすほどに元気株なのです。

児童書全体の中の「絵本」に絞り込んでみると、その市場規模は316億円で、児童書全体の36.4%を占めているのです。2011年～2016年の平均では40%近くを維持しています[5)]。なんとも頼もしく、元気の湧くデータではありませんか。電子書籍に対抗する力と、魅力を絵本は備えていると言えるでしょう。

盛り立て役はミリオンセラー

絵本の魅力のひとつは、40年、50年前に出版されたものが、時を超えて読み継がれ、世代を超えて愛され続けていることです。ミリオンセラーと呼ばれる累計発行部数100万部を超える絵本群が勢いをもち、これらは20年30年をかけて100万部に達するもので、文芸書のように１年でミリオンに達し、それでおしまいではないことが特徴です。実は絵本の売上を支持して、活力となっているのがこのミリオンセラーであり、ロングセラーなのです。出版取次会社のトーハンがまとめている絵本のランキング小冊子「ミリオンぶっく」最新の2017年版のベスト10をみてみましょう[6)]。

1 『いないいないばあ』（福音館書店）622万部
2 『ぐりとぐら』（福音館書店）495万部
3 『はらぺこあおむし』（偕成社）389万部
4 『てぶくろ』（福音館書店）309万部
5 『おおきなかぶ』（福音館書店）288万部
6 『しろくまちゃんのほっとけーき』（こぐま社）287万部
7 『ねないこだれだ』（福音館書店）286万部
8 『ぐりとぐらのおきゃくさま』（福音館）277万部
9 『三びきのやぎのがらがらどん』（福音館書店）262万部
10 『ノンタンぶらんこのせて』（偕成社）251万部
10 『いないいないばあ あそび』（偕成社）251万部

『いないいないばあ』
松谷 みよこ 文
瀬川康男 画（福音館書店）

2006年より発表してきた「ミリオンぶっく」ですが、リニューアルされた2017年版では、大きな変動が随所でみられます。一大トピックは、それまで11位、12位だった『ノンタンぶらんこのせて』と、木村裕一作『いないいないばあ あそび』がはじめてベスト10入りしました。注目すべきは、初10傑入りの『いないいないばあ あそび』を除く、10作品は、すべて1960年～70年代に刊行された絵本だということです。そこに、はじめて1988年初版本がベスト10入りし、絵本界にまた、新たな風が吹き始めました。不動の上位３作品は、刊行から40～50年たった現在でも、ベストセラーとして売れ続け、多くの子どもたち、大人たち、それから絵本界を元気にしている絵本なのです。

出版社の情熱で息吹く絵本

ミリオンセラー上位10作品をみると、「福音館書店」の名前に注目してしまいます。1952年に創業し、「大人も子どももいっしょに感動できるすぐれた絵本をつくる」[7]ことを理念に、一貫した創作・出版活動を続け、絵本界を牽引してきた老舗出版社の歴史を物語っているようです。

長らく３位に鎮座する巨塔『はらぺこあおむし』の偕成社は、「ノンタン」と『いないないなばあ あそび』がベスト10入りしたことで、上位10傑にその名を３作品連ねることになりました。「ノンタン」は、９作品がベスト50に位置するほどシリーズまるごと人気なので、実質、二大看板であることは間違いありません。そして、「きむらゆういち あかちゃんのあそびえほん」シリーズの第１作～３作が、初版発行から30年近くがたってロングセラーの域に達し、ミリオンベスト10の仲間入りを果たしました。15位には、『ノンタン サンタクロースだよ』、『からすのパンやさん』（かこさとし）、『じゃあじゃあびりびり』（まついのりこ）と、偕成社の３作品が同率で肩を並べて、20傑以内に８作品を占有しています。これは、福音館書店の10作品に続くもので、絵本の大手出版社ツートップであることは明白です。

『はらぺこあおむし』
エリック・カール 作
もり ひさし 訳（偕成社）

偕成社が創業したのは1936年で、はじめは文芸などの一般書も出版していましたが、戦後、子どもの本を専門とする出版社になり、1950年には世界文学を子どもに読みやすく翻訳した「世界名作文庫」を創刊しました。「子どもたちの成長とともに自分たちも成熟していきたいという出版人の思い」[8]が社名にこめられているとおり、日本における児童書の興隆に貢献してきたのです。

生きている「絵本」

偕成社の社長・今村正樹氏は、10年以上前の講演会で、2001年のミリオンセラー（１位『ぐりとぐら』302万部、３位『いないいない ばあ』271万部、４位『てぶくろ』221万部、５位『はらぺこあおむし』213万部）について、「一過性でバッと100万部売れてそれで終わりでない、生きている本」と表現し、「紙の本が生きていればの話」との前置きをしながら、当時の「ミリオンセラー50点くらいは、たぶんあと25年、全体で50年くらいまでは寿命は大丈夫だろう」と述べ、また紙の本について「他の分野がダメになっても、子どもの紙の本は最後まで生き残る」との希望的な観測をされています[9]。ページをめくることで読者が物語の一員になれることも重要なキーワードの絵本ですので、様々な要素を考えたとき、デジタルでは失われてしまったり、乏しくなったりする表現は否めず、紙の絵本の楽しみ方と異なってしまうと思います。

ミリオン１位、２位に位置する『いないいないばあ』と『ぐりとぐら』は共に1967年の刊行ですから、昨年めでたく50周年を迎えました（「ぐりとぐら」は63年「こどものとも」初出）。折しも出版市場最盛期の1996年に、『ぐりとぐら』は100刷を数え、普及版と合わせた発行部数が350万部を超えました[10]。当時、市場の波に乗り、『ぐりとぐら』と肩を並べていたけれど、現在は消えてしまった絵本もたくさんあります。ぐりとぐらは、今村社長の計算された50歳の寿命を超えて、ますますの大人気ぶりです。『はらぺこあおむし』も同様で、1997年刊のボードブック（2017年ランキング20位、225万部）と合わせて、50年後も子どもたちの人気者であり続けていることでしょう。

読み継がれていくわが家の一冊

『いないいないばあ』が刊行された1960年代後半から70年代に生まれ、『ぐりとぐら』をお友だちに育っ

ビブリオベイビー Bibli Baby
連絡先　福岡市南区大橋 3-2-1 2F
絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ
TEL 092-557-3272　URL http://bibliokids.jp
E-mail
安藤：bibliokids.baby1@gmail.com
濱野：hamano@genkigawaku.com
木須：nobuokisu@gmail.com

た世代がいま、50歳を筆頭にした40代にいます。子ども時代にきょうだいで絵本を共有し、自分の子どもに読み、そして今度は、子ども世代がその子ども、つまり、孫世代へと読み継いでいる家庭も存在しています。さらには、その次の世代へと読み継がれていくのです。40年、50年、それから60年と脈々と読み継がれていくというのが、絵本の大きな特徴と言えます。一冊の絵本が各世代間の思い出を作り、積み重ねながら、世代をまたに架けて長く読み継がれていく愛読書は、他のジャンルにはありません。

ゲームもDVDも、ケータイもなかった昭和時代の子どもたちと、映像メディアの発達した平成の子どもたちとが、同じように惹きつけられ、魅了されるところにミリオンセラー、ロングセラーとなる絵本の要因が見え隠れします。『ぐりとぐら』のお話は、本連載で何度も取り上げてきましたが、色の視点、シリーズものの楽しみ、歌遊びの広がりなど、角度を変えた魅力を多数、備えていることがわかります。世代を超えて愛され続ける絵本には、キャラクターの愛らしさや、物語の楽しさだけでなく、テキストや構成など複数の重要な要素を持ち合わせているのだと説明できます。

50年後も紙の絵本が存在することを願って

出版不況にあって、元気な絵本のことをお話してきましたが、書籍全体の売上に貢献したとは言っても、絵本とはそもそも短期間で爆発的な売り上げが望まれるものではないということです。長い年月をかけ、読者たちが世代を超えて読み継いでいるうちに、気付けば発行部数が100万部を超える長寿絵本となっていたというのが特色で、絵本作家の創作する絵本を「良い絵本」と評価し、残していっているのは、読み手ということでしょう。

しかし、そればかりではないことを補足しておきます。先ほど「絵本は短期間で爆発的な売り上げは望まれない」と言いましたが、実はその偉業を成した絵本があり、全く望めないことではないのです。17cm角の白い表紙に愛らしい表情の真っ赤なダルマが鎮座する『だるまさんが』。皆様方の歯科医院待合室に置いてあるかもしれませんし、子どもたちの喜ぶ反応を目の当たりにしている方も多数おられるはずです。2008年に発売された本書は、初版からわずか6年で117万部という、まさに「爆発的」な発行を成し遂げたのです[11]。新人作家の作品がわずか6年というのですから、絵本界も驚きです。続編の『だるまさんの』『だるまさんと』の三部作は、現在では赤ちゃん絵本の定番として、『いないいないばあ』と肩を並べています。本書でデビューした遅咲きの絵本作家・かがくいひろし氏は、残念なことに『だるまさんが』が出版された翌年に急逝されました。

絵本に息吹を注ぐのは、作家であり、出版社であり、私たち読者なのです。小さな子どもも、大人も、心に響く絵本に反応し、繰り返し読みたくなる衝動にかられてしまいます。そんな魅力的な紙の絵本が50年後も元気に存在することを願って、時代が移り変わる平成の終わりの今、私たち大人が絵本の魅力をどんどん発信していきましょう。

文献

1）読み聞かせ絵本雑誌「おひさま」が休刊へ，スポニチ web, 2017/10/3 HP http://www.sponichi.co.jp/
2）佐々木利春，他編集スタッフ 編：出版指標 推定販売金額，出版指標年報 2017年版，公益社団法人 全国出版協会出版科学研究所，東京，2017, p. 3.
3）書籍が雑誌上回る 16年売り上げ、41年ぶり，日本経済新聞web刊，2016/12/26 HP http://www.nikkei.com
4）同上[2]：出版業界の動き－2016年出版概況，pp.27-35.
5）同上[2]：書籍の出版傾向－児童書，pp.128-132.
6）株式会社トーハン：ミリオンぶっく2017年版，トーハン，東京，2017.
7）粕谷一希，松居直：編集とは何か，藤原書店，東京，2004，pp.60-81.
8）偕成社HP http://www.kaiseisha.co.jp/
9）今村正樹：児童書出版は、戦後どのように成長してきたか，ず・ぼん，12, p.12-31, 2006.
10）牧　忠彦，他編集スタッフ 編：書籍の出版傾向－児童書，出版指標年報 1997年版，全国出版協会出版科学研究所，東京，1997, p.121.
11）株式会社トーハン：ミリオンぶっく2014年版，トーハン，東京，2014.